

贈与の力

ニュージーランドのマオリにとって、贈られた物には霊（Hau）が宿る。返礼の義務は、贈られた物そのものの本性から生じる。その物は決して不活性で受動的なものではなく、「霊」を備え、外的な力のように受贈者にのしかかり、ついには返礼を強いる、というのである。

この理論によれば、「贈物の霊」は、各人がさまざまな交換形態の品々の上に残す痕跡に由来する。

同じ刻印を、芸術家もまた、自らの作品の素材を扱うときに残す。

今日、私たちの世界が貨幣の使用によって規律されているとはいえ、芸術は少なくとも部分的には富の蓄積の論理から自らを解き放ち、異なる役割へと高まり、人と人との相互の信頼を試みうる領域となるべきである。

私は、毎日語り聞かされる貨幣の嘘に自分を映し出すつもりはない。芸術家は別の仕方でも考えることを強いられていると私は信じる。だからこそ、この無用の身振りを行うのだ——それが時とともに芽吹き、私たちに何か新しいものを贈ってくれるように。

もしあなたがたがそこに意味も有用性も見いださないのなら、私たちは正しい道を歩んでいる。

この無意味な無用性のまわりに生み出しうる関心こそ、私を休みなく仕事へと駆り立てる力なのだ。

事実として、もしすべての人が自らの可能な範囲で贈るなら、世界の大半の問題は解決するだろう。さらに、百を贈れば千が返ってくると確信できるなら、私たちは時間の大半を、誰かへの贈り物を探すことに費やすだろう——自分のものではあるが不要のないものを手放すためだけにでも。

私たちは、さいころの六つの面が投げるたびに等しい確率で出ることを知っている。百万回投げれば、六つの面が等しい回数だけ出ることを知っている。それでも、ただ一度だけ投げるとき、私たちはなお結果が偶然だと思う。

人生そのものが一見偶然の贈り物であるのに、それでも、他人の人生を害そうとし、隣人から奪えるものを自分のためにため込み、すべてを失う恐れの中に生きて、それに生涯を費やす者がいる。

ローマ、2023年1月

贈与とは、互酬の原理に基づく全体的社会的事実であり、多大な自由を含む。確かに返礼の義務は存在するが、その仕方や時期は厳格ではなく、いずれにせよそれは道徳的義務であって、法によって訴追されることも制裁されることもない。贈与の価値は、贈る者にとって何の保証もないことにある。その保証のなさは、他者への大きな信頼を前提とする。

マルセル・モース（『贈与論』、1923年）

Luca Motolese

motolese.com — 原文はイタリア語